

[シンポジウム報告 ③]

## 輸出による地域創生

千葉と全国の事例

総合地域研究所所長・経済学部教授

藪内 正樹

安井さんの講演の中に、今治タオルのお話がありましたが、私が昨年まで所属していましたJETRO（日本貿易振興機構）も、日本の地方の製品、特産品、食品、日本酒などを海外に紹介する、輸出支援をする、といったことを重点事業として展開しております。

2001年、02年頃、ニューヨークのリビングフェア（インテリア用品、家庭用品の見本市）に、今治のタオルのメーカーの参加をいただき、出品しましたところ、グランプリを獲得したということがありました。そのタオルは完全に有機で安全な綿を原料にしていました。

当時も今も、ブラジル、インド、中国、アメリカが主な綿花の産地ですが、特にアメリカは輸出補助金を出して農家を保護する、WTO（世界貿易機関）違反をするアンフェアな国です。また、ブラジルやインドでは枯葉剤を使って葉っぱを落とし、取りしやすくしたうえで綿を収穫していたそうで、非常に危険なものでした。

それに対し今治のタオルメーカーは、赤ちゃんが口に含んでも安全なタオルというものを作り、その結果、グランプリを獲得したのです。JETROとしても、それをひとつの成功物語とし、「JETROがお手伝いをしたらグランプリをとってしまった」といって、事例の紹介に多く使わせていただきました。

最近はアメリカもEUも景気がパッとしないものですから、JETROはアジアを売り込み先の中心にしてアジアキャラバンと呼ぶ事業を展開しており、アジアの主要都市で商談会を開催しています。また、マッチングサイトなどインターネット上でもマッチング（商談・案内）を行っています。これは商品モニタリング調査など、現地でどのように評価されるかということを、バイヤー側、ユーザー側、消費者側それぞれの意見を集め、そこから情報提供、個別支援、海外と取り引きをする上での注意点など、アドバイスを個別に提供することを通して、色々なものをアジアのマーケットに紹介しています。

おおむね日本製、日本産という点、安心・安全をアピールする、そういうコンセプトになることが多いです。また、機能性をアピールする、あるいはファッション性、デザイン性をアピールする。紹介する商品に沿った段取りを、ステップを踏んで輸出を支援していきます。

そして2014年、昨年度はもう中国に絞ってしまいました。北京、上海、成都、深圳、台北……。しかし中国経済の成長率は、これからだんだんと下がっていきます。現在、加熱した不動産投資が抑えられたことにより、お金が株にしか行かず、中国株は大変高くなっていますが、これは完全にバブルであり、やがて財産を失う方が増えていくと思われます。中国を重点に売り込もうとするのも、3、4年後にはガラッとお天気模様がかわっているかもしれません。しかし、昨年や今年はまだ高い関心が続いています。

ただしこれは、募集、要するにこれに乗って、事業を外国、アジアに持っていきたいという募集が4月から5月頃にあり、そこで決まりますので、これにご関心のある方は、今から準備万端整えていただいて、来年の4月に申し込みをお願いします。日本全国から多くの応募があり、様々なことをしてきました。

日本全国から集まった応募の中に、千葉県のもものがどれだけあるのかというと、5年間で8件でした。1番多かったのが東京都、2番目が大阪府なのはもっともなのですが、全国で見ると、千葉県の件数は多くはないのだけれど決して少ないわけでもありません。ゼロという県もあります。岐阜県や愛知県が多いのは、名産である陶磁器などの海外での認知度が既に高く、成功しやすいことが原因としてあります。窯元さんが多く集まり、この事業を活用されているそうです。

さて、千葉県の8件というのは本当にあるのだろうか、調べて表を作りましたところ、その会社が千葉県のどこにあるかといいますと、千葉と東京を結ぶ総武線沿いにある会社が多かったというのは、予想通りでした。キッチンタイマー、歯ブラシ、消臭剤、洗浄水、家庭用温度計、メガネケースなどをつくる、いずれも製造業を営む中小企業です、また、特産品、千葉県にも必ず銘酒があるはずだと思いますので日本酒、これらも探したいと思います。

このように千葉県の中小企業も頑張っておりまして、輸出というのも地域活性化の一つの方法だと思います。

私は神奈川県横浜市の生まれです。父は横浜で仕事をし、私は東京の学校に通っていたので、首都圏育ちとしか言いようのない人間です。20年と少し前に流山市に引っ越してきたのですが、職場が港区のJETROということもあり、千葉県人であるという自覚はあまりありませんでした。

昨年、中国経済や中国ビジネスを専門に教えています。中国は様々な問題を抱えています、その中国のおかげで再就職をした先が、この千葉市稲毛区の敬愛大学だったわけです。もう住まいも職場も千葉県になりました。ここで見聞きするお話は大変興味深く、千葉県に関心を持ち始め、売り込める資源が数多くあるのではないかと感じるようになりました。

千葉県は、必ず生き残る力のある産業である農業は全国3位です。東京に近いので物流、倉庫が豊富で、大変な貨物を扱う成田空港があり、東京湾を臨み港も多く、さらには自然にも恵まれています。

数日前に購入した『なぜローカル経済から日本は甦るのか』はよく売れているのだそうで、東京に本社のある大企業から日本経済は甦らず、地方の企業から甦りが始まるのだということが書かれています。著者の富田和彦さんは、ボストン・コンサルティング・コーポレーションの日本の代表や、産業再生機構で仕事をされています。

グローバル経済というのは、オリンピックのようであり、AppleやGoogleのような企業ではない限り存続できません。日本はもう工場を増やすなどという古いビジネスモデルの時代ではないのです。したがって研究開発や商品開発、システム、新たなビジネスモデルを考案、サービス、情報を集めること、情報を分析して商品開発に反映させることが重要となります。日本企業は技術の開発は得意なのですが、システムやビジネスモデルの開発、情報を分析することなどは苦手ではないかと思います。

この本には、グローバル経済に参加する企業は、これからさらに改善、強化をしていかなければならない、とあり、さらに、ローカル経済は、ローカル経済の下に地域社会の充実、雇用、出産、子育て、といった地域の課題が結び付き、競争は他地域の会社との間に競合関係がないので、お互いに学び、よいところをどんどん吸収し、生産性やサービスをどんどん改善していくことができる、それはグローバル経済に参加する企業の競争とは全く異なり、発想を変えるべきだ、とあります。

課題は人手不足、生産性が低いといった問題であり、世界で競争する企業とは課題も異なります。

先ほど、浜本さんが紹介されましたこの資料は、文部科学省の補助金で、人口流出地域に学生を就職させて地域を支え、地方創生につなげていこうというプログラムに応募するために、千葉大学が作ったものです。千葉県全体では人口が流入しており、社会的増加といいますが、増えています。白い所、色の付いていない箇所が人口が流入している地域、これは首都圏のベッドタウンとして人口増です。一方、色の付いてる箇所が人口が流出している地域です。

流出している地域が、合計で2,000人ほどです。20歳から24歳までの人口流出ということから、大学を卒業して就職するとともに、千葉県に住んでいた方が出ていったということがわかります。白い箇所は8,000人も流入していますが、他の地域は合計2,000人ほどの流出です。千葉県の大学としては、この色の付いた地域に産業を興し、そこに地元の人が就職していくという流れを作っていこうということなのです。

先ほどの今治のお話では、小さいときに子どもにおいしいものを食べさせれば、成長した後にもその味を思い出し、その土地に住みたくなり、自分の子どももそこで育てたいと思うようになる、というサイクルが必ず実現するということです。大変いいヒントをいただきました。

私は今年から総合地域研究所の所長になりましたが、本日のシンポジウムをスタートとして、本日お伝えしたことを、少しでも実現できるよう活動をしていきたいと思います。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。